

中井だよい

中井やまゆり園

ため息をついて、本音を語れる寮づくりを

生活第一課 山寮長 佐志 賢太郎

強度行動障害事業施設として海寮で行動障害の方々を受け入れ始めてから20年が経ちました。今思うと、当時の入所した利用者もどのような生活環境で暮らすのか、さぞかし不安だったのではないかと思います。また、職員もどのように支援を展開していいのか、お互いに右も左もわからない状態で手探りしながらスタートしたことを覚えています。自閉症の特性を有する障害をお持ちの方は、一般的に聴覚よりも視覚的に優位性があるので、その特徴を生かして“構造化”の手法が用いられます。当時の海寮の場合も、その人にわかりやすいように写真や文字を使って様々な工夫を凝らして、先の見通しを持ってもらうためにスケジュールカードを使用して活動してもらいました。すぐに安定はしなかったにせよ、ベースとなる基本的な日課や今やるべきことなどはたくさんアイデアを出して工夫できたと思います。私は、一年で海寮から活動支援班に異動し行動障害を有する方々の作業班を担当することとなり、その後はユーミン作業所の石井所長の協力の下、缶つぶしやシャープペンなどの受注作業に取り組み始めました。利用者の集中力はすごいもので、一日あたりに4千本近い製品をみんなで作り上げては納品し、利用者一人一人に月に1万円の報酬を渡すなど、私自身も驚きの連続でした。私もこの作業班に全精力を上げて熱を注ぐことができたことは、とても良い経験となりました。

作業班を去って異動し、あれから15年、山寮の寮長として今年再び戻ってきました。15年前に作業班の時にお世話になった利用者が山寮で複数名過ごされていて、順調に落ち着いて生活されている姿を拝見し、これまた驚きました。年齢を重ねただけではなく、こんなに変わったのか、落ち着いたのかと。

昨年11月にあった不適切な支援は、私は資料や職員の引継ぎからしか知ることができませんが、とても残念なことです。それによって欠員が生じ、そのアンバランスさからか、4月に私が赴任してきたときには職員はとても疲弊していました。私に何ができるかと悩む間もなく、直感的ではありましたが、事故のリスクを減らす環境を整えることから始めました。利用者に適した居室に変更したり、少しでも怪我をしそうなものがあれば撤去し、転倒して頭を打っても大丈夫なように個別にベッドソファなどを購入していただいたりしたところ、生活感もアップしました。

障害はその方の“個性”とよく表現されます。自傷や破壊、他者への攻撃行動といった特性を有する行動障害の“個性”同士が、寮内でぶつかり合うことがよくあります。職員もその時は、利用者が怪我をしないように全力で防いだり、対処方法を考えて話し合ったりします。施設職員として支援する以上虐待行為があってはなりません。また、誤解されないように努めなければなりません。働いている職場環境の「風通しのよさ」が良く指摘されることがありますが、これは職員相互に意思疎通がなされていれば、お互いに間違った支援であることも指摘し合えるから虐待も起こりづらくなるというもの。

では山寮はどうか。4月以前の状況を知らないので何とも言えませんが、現在は職員相互にとっても話しやすい雰囲気だと思います。山寮の職員室では“ため息”をつく職員がたくさんいます。それは一生懸命利用者のために頑張っている証拠だからです。自分の思い描いた支援とは裏腹に、叩かれたり、動かなかったり、こだわったりと、様々な場面で意図することが覆されます。一般社会的には、隣の人がため息をついたときはあまりいい気分がしませんが、私は敢えて“どんどんため息をついてください”と職員に言いたいです。隣の職員がため息をついたときには、「どうしたの?」と声を掛け合ってほしいと考えます。そんな職員が増えてほしいし、疲れたり悩んでいるときは、みんなで素直に本音で話し合っほしいからです。今の山寮だったら出来るかなと。山寮は、ため込むより吐き出して、みんなで考える前向きな寮体制を目指していきたいと思います。